

江戸情緒 追いかけて

文人の 武蔵野

1908年(明治41年)、夏目漱石は41歳の年に小説「三四郎」の連載を始めます。主人公の小川三四郎は、九州から上京した青年で、初めて見る東京にひたすら驚きまです。「丸の内」では「どごまで行っても東京だ」と驚き、「破壊」と「建設」を同時に見せるやかましい風景に驚くのです。「建設」されているのは近代都市であり、「破壊」されているのは武蔵野の自然

夏目漱石 ④



都立井の頭公園内にある井の頭弁財天

と江戸の文化ですが、若い三四郎に深い地政学的な認識があったわけではありません。「三四郎」について司馬遼

太郎は、「田舎はなお江戸時代をひきずっているころ」、東京にだけ文明があるという特殊な歴史的事情の上に作品が成立しているという点で「世界文明史上の奇譚」だとしています。

文明圏としての東京を描き、そこに破壊と建設を見いだしている点では国木田独歩の「武蔵野」(1898年)とも共通しますが、漱石はこの小説にも武蔵野を登場させませんでした。

漱石は、武蔵国江戸牛込馬場下で生を受けていますので武蔵野生まれの江戸っ子と言えます。東京という地名が誕生したのは漱石が生まれた翌年です。小説家になってからの漱石は、自然と共生する武蔵野よりも、日本という国の将来や江戸情緒の名残を追い

かけていたように見えます。そんな漱石も、文明から離れた郊外の散策を好み、1913年11月には、井の頭の弁財天を訪れています。皇室の御料地だった井の頭池一帯が日本で最初の郊外型公園となる少し前のことでした。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

(岩波書店提供)



おすすめの1冊

「三四郎」

主人公の名前をそのまま題名にした小説「三四郎」は、まだ名声を得ていなかった当時の夏目漱石が、職業作家としての勝負を懸けた一作でした。熟知する東京と大学を舞台に選び、上京者の眼差しで描いた青春小説です。正岡子規の名も登場しますし、武蔵野の面影の残る場所も「郊外」として描いています。